62さい

1950

第二回日本宣教

東京

エバ・ミリカン先生には、ずっと心に残っていたことがありました。それは、日本のこと、日本人のことです。

「神さまは、わたしがもう一度、宣教師となって日本に行くことを、望んでいます。」ミリカン先生のもう一度日本へ行く、という考えにみんなはびっくりしました。宣教師を送り出す『外国宣教局』もミリカン先生が歳をとっているという理由で、先生の申し出を受け付けてくれませんでした。

「もう一度、日本の人にイエスさまを知らせたい！」ミリカン先生は、日本に行くためのお金を作ろうとして、自分の家を売ってしまいました。それでもまだ足りません。でも、神さまが助けてくださることを、ミリカン先生は信じていました。

そして、祈りが聞かれて、ある一人の友だちが、日本へ行くなら毎月お金を送りましょう、と言ってくれたのです。ミリカン先生は、神さまに心から感謝しました。

アメリカをたって20日後の1950年1月15日、船は横浜の港に着きました。エバ・ミリカン先生は、船旅のあいだ中ずっと神さまにお祈りしていました。これから始まる宣教をイエスさまが導いてくださるように、お願いしていたのです。「主よ！　わたしはあなたに導かれて、もう一度この日本にやってきました。弱い小さなわたしを用いて、神さまのすばらしさを現してください！」また、今は亡きロイ先生にも、呼びかけました。「ロイ！　あなたと共に愛して、共に働いた日本に、今また来ました。あなたが、あれほどもう一度行きたいと願っていた日本です。あなたといっしょでないのが残念ですが、イエスさまが共にいてくださいます。あなたの分まで働きますよ！」戦争に負けたばかりの日本、まだ町も人の心も荒れていた日本に、ミリカン先生は、ただイエスさまを信じて、やってきたのです。

エバ・ミリカン先生は、東京の荻窪に家を借りて住みました。８畳と３畳の部屋しか無い小さな家でした。そして、近くから遠くまでいろいろな教会に行っては、神さまを伝える仕事をしていました。

ある日、ひとりの高校生が訪ねてきました。「先生、ぜひぼくたちの学校で、英語を教えてください。」高校生は、一生懸命お願いしました。でも、ミリカン先生はこう言って断りました。「わたしは、日本のみなさんにイエスさまのことを伝えに来たのです。英語を教えに来たのではないのです。」それでも高校生はあきらめず、何度もやってきてお願いするのです。とうとうミリカン先生は、その高校生の熱心さに心を動かされて、英語で聖書を教えることを引き受けました。

こうしてバイブル・クラスが始まりました。そこは、英語で聖書を学びながらイエスさまを伝えるという、大切な働きをする場所になりました。

高校生たちは、一人、二人とイエスさまを信じるようになりました。ミリカン先生は、借りていた部屋を、高校生たちのために礼拝堂とすることに決めました。

1951年9月4日、はじめての礼拝が開かれました。出席したのは19名でした。ミリカン先生は、日本人と変わらないほど上手な日本語で、イエスさまの話をしました。すぐに、若い人ばかりではなく、年配の人もイエスさまのことが知りたくて、集まってきました。二部屋の集会所は満員になって、これ以上は人が入れなくなりました。もっと広い場所、新しい会堂が必要になってきたのです。

ミリカン先生は、必要ならば神さまが必ず与えてくださると、信じていました。ほんとうに神さまは、いつでもミリカン先生のお祈りを聞いてくださったのです。

次の年、ミリカン先生はアメリカに帰って新しい会堂が必要であることを、みんなにうったえました。ミリカン先生の言葉にアメリカの人たちは、会堂を買うためのお金をささげる約束をしてくれました。そのお金は全部で2,365ドルでした。

$ 2,365

ミリカン先生は、神さまに感謝しながら、日本へ戻りました。

新しい会堂のための、土地さがしが始まりました。ある日、近所の人が、武蔵小金井駅の近くに安い土地があることを教えてくれました。行ってみると、道は石ころだらけで、その土地には雑草が茂っていました。でもミリカン先生は、その土地に立つと「ここだわ！　神さまがくださった場所だわ！」と、信じたのです。

その土地をいくらで買うことができるのか、持ち主に聞いてみました。その答は、アメリカのお金にすると 2,364 ドル数セントでした。「まあ、なんて神さまのなさることはすばらしいのでしょう！　これで、この土地こそ神さまがくださった場所だということが、はっきりわかったわ！」その土地の値段はアメリカの人たちがささげてくれたお金と、ほとんど同じだったのです。